

NEXT CONCERTS
次回東京定期演奏会

第 **756** 回

サントリーホール

フルート
藤田 崇文氏

2023年12月8日(金)19:00開演 18:30~

9日(土)14:00開演 13:20~

故外山雄三が日本フィルに遺してくれた名作《まつら》と
カーチュンがこよなく愛する伊福部&ショスタコーヴィチ

指揮: **カーチュン・ウォン**
【首席指揮者】

マリンバ: **池上 英樹**

外山雄三: 交響詩《まつら》

伊福部昭: オーケストラとマリンバのための
《ラウダ・コンチェルタータ》

ショスタコーヴィチ: 交響曲第5番 二短調 op.47

©Angie Kremer

©Yuji_Hori

1回券料金 S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C 完売 P ¥4,000 Ys (25歳以下) ¥1,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー! カーチュン・ウォン 編

聞き手 八木 宏之

—第756回東京定期演奏会は、前半が外山雄三と伊福部昭、後半がショスタコーヴィチというカーチュンさんらしいプログラムです。

今回のプログラムはさまざまな要素が絡み合って出来上がりました。この演奏会はもともとアレクサンドル・ラザレフさんが指揮する予定だったものなので、ショスタコーヴィチの交響曲第5番は来日を果たすことができなかったラザレフさんと結びついています。外山雄三の《まつら》は、先日92歳でこの世を去った外山さんへのオマージュとして選びました。そしてこのふたつの作品に、いま深掘りしている伊福部昭の《ラウダ・コンチェルタータ》を組み合わせ、今回のプログラムが出来上がったのです。

—外山さんの《まつら》は日本フィルと縁の深い作品ですね。外山さんの作品では《管弦楽のためのラプソディ》がよく知られていますが、《まつら》は《ラプソディ》とは対照的に、静謐さが際立ちます。

《まつら》は佐賀県唐津市の人々がお金を募って外山さんに委嘱した作品で、1982年の日本フィル九州公演で初演されました。1985年に行われた日本フィル初のヨーロッパ・ツアーでも、初演した渡邊暁雄さん及び小林研一郎さんの指揮で演奏されています。「まつら(松浦)」とは唐津を含む地域一帯を指す古い呼び名で、この地方に住む人々の静かな営みがオーケストラによって描き出されています。私は以前から唐津の海を訪れてみたいと願ってきました。大型のフェリーやタンカーが行き交うシンガポールの海とは異なる、玄界灘の静かな海にとっても惹かれるのです。ですから、今回《まつら》を指揮する機会を得ることができて、とても嬉しく思います。

—カーチュンさんはいま、日本フィルと公演ともに伊福部作品に集中的に取り組まれています。1月の《シンフォニア・タプカーラ》も圧巻の熱演でした。今回取り上げる《ラウダ・コンチェルタータ》は、マリンバ奏者にとって欠かすことのできないレパートリーとなっている作品です。

これまで繰り返し愛聴してきた《ラウダ・コンチェルタータ》を、ついに演奏する機会が巡ってきました。この作品には、伊福部の代名詞というべき「オスティナート」だけでなく、北海道の遠い地平線を思い起こさせる、深い叙情性が感じられます。それはどこかシベリウスの音楽のようでもあるのです。伊福部とシベリウスの音楽言語は全く異なりますが、壮大な自然の空間を自らの土台としている点で、両者は似通っているのかもしれませんが。伊福部はマリンバを打楽器的に扱うだけでなく、ときに歌手のように歌わせませす。日本を代表する素晴らしいマリンバ奏者、池上英樹さんとの共演がいまから楽しみです。

—後半に演奏するショスタコーヴィチの交響曲第5番は、この作曲家のもっとも人気のある作品ですが、ショスタコーヴィチがこの交響曲を書いたとき、彼はソビエト社会で非常に難しい立場に置かれていました。

ショスタコーヴィチはオペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》でスターリンの不興を買い、『ブラウダ』誌上で激しい攻撃にさらされました。この出来事は、ショスタコーヴィチの創作活動に多くの制約をもたらしました。そうした状況下で作曲された交響曲第5番は、アーティストに制限を設けたときにどんな作品が生まれるのか、という問いに対する偉大な答えと言えるでしょう。この交響曲はそれまでのショスタコーヴィチの作品にはなかった明快さを持っていますが、一方で凄まじい緊張に貫かれており、1音たりとも無駄な音はありません。

第1楽章の幕切れのチェレスタの響きは鳥肌が立つほど恐ろしく、第2楽章の皮肉に満ちたスケルツォは、誰かに銃を向けられて無理矢理踊らされているかのようです。第3楽章の果てしない孤独では、クラリネットの金切り声人間的なテクスチャを作り出します。第4楽章のクライマックスはまるで人間の頭に釘を打ちつけながら、白いものを黒と言わせているかのようです。

—12月の東京定期演奏会を楽しみにしている日本フィルのファンへメッセージをお願いします。

これまでマーラーやバルトーク、ヤナーチェクなど、さまざまな作曲家を取り上げてきましたが、今回のプログラムは、これぞ日本フィルと言うべきもの。オーケストラの伝統や持ち味が存分に堪能できるはず。大いに期待ください!

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

後援: シンガポール共和国大使館

文化庁
Agency for Cultural Affairs
Government of Japan